

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	人格的宗教とヒューマニチー[承前] : 論説
Author(s)	吉田, 修夫
Citation	龍南會雜誌, 88: 29-37
Issue date	1901-11-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5239
Right	

而不淫、小雅怨誹而不亂、若離騷者可謂兼之矣と稱せり。乃ち二十五篇も亦興觀群怨の徳を具へ、人倫の大義を表示したるものなるや明白なり、故にこの一事は三百篇廿五篇も同一の資格なりと謂ふべし。且多く草木鳥獸の名を識ることは、固より第二の目的に屬して、詩の主眼に非すと雖も、屈原の作の如きも、多く草木鳥獸の名を識るの便あること、決して詩經に譲らざるなり、梁の劉杳、宋の吳仁傑、及び明の屠本峻は皆離騷草木疏を著はせるを以て察すれば、離騷が如何に多く草木を引擧せるかを知るに足るへし、特に吳仁傑は離騷の文に奇々怪々の處ありと雖も、決して空に架して辭を設けたるものに非ず、實に山海經に本けるものなりとて、書中の引證に屢山海經を引きて斷案を爲せり。顧ふに離騷が果して山海經に本げるや否やは、未だ容易に信すへからずと雖も、亦彼の賦する所の如何に博瞻該洽なるを知るに足らん

人格的宗教とヒューマニチー

吉 田 修 夫

人格の實在とヒューマニチーの眞價

如述の人格は。實に天にも地にもあらざる尊嚴なる勢力なり。この勢力ある時は、人間の腦中に生じ来るあらゆる忘念邪慾は、容易に抑制することを得るなり。然れども是の主宰力なき時は、即ち其の者に人格嚴然としてあらざれば、死物と同様なり即ち本我の滅亡したるものなり。

斯くの如く人間彼自身の生殺與奪は、實に之の人格實在の有無（元ど人格は人間各自に賦與されたるも是には或意味にて使ふ）による。眞に吾人は之の人格なる主宰力に對しては、決して抵抗する

ことを得ず。全然服従せざる可からず。服従せざれば直ちに心靈の上に、罪の宣告を科せらるゝに至る。前段に言ひし如くある意味に於ては、個人の上に立てる絶對的勢力なり。

前述の如く洪水は恐るべきものなり。然れども不肖吾輩に於ては之を尊敬せず、之を戦ふの勇氣あり。家を吹き倒す大風の力は、實に凄らしきものなり。然れども小生のハートは、之が爲めに避易せざるなり、蓋は是れ物力なればなり。然れども其の勢力光明の前には如何にしても服従し、平身低頭せざる可からざるものは、眞に彼我の心中に嚴然として現はれ來る活ける主宰力即人格なり。今試みに人類の崇拜者となれるものを見るに、東洋の光、東洋の崇拜者となりたるものは、孔子釋迦なり。西洋に於てはモーゼ、ソクラテスなり。又世界の崇拜者となれるものは基督なり。又小にしてはナポレオン、アレキサンダー、或は秀吉の如きものは是れなり。彼等は同じ人間にして而も何故に然かく被拜崇者たれるや、其學理の深遠なるによるか、あらず。其の智力の博大なるによるか、あらず。其技倆の敏達なるによるか、あらず。決してあらず。之れ全然其人格に由らずんばあらず。其の人格の現はれて品格となり、其品格の活動して感化力となりて、人心を收攬支配するに至りしなり。是に注意すべきは、秀吉、那氏、阿氏等と共に一種の主宰力ありしが故に、能く其天下を收攬し、天下を手足の如く使役したりしか、彼等の主宰力は寧ろ武斷的主宰力にして、肉心的主宰力即ち眞個の人格からざりしとなり。故に其勢力たるや有限なりき。其の及ぶ所、只だ一代に過ぎざりき、然れども基督や釋迦や孔子の感化は、今日に至るまで働き、殊に基督の感化は、人類の影響ある所に伴へり。是れ即ち其人の自明力、道義力即人格の偉大なる事を表はすものなり。

今この人格を個人發達の順序に見るに、幼稚なるものには未だ表はれざるものと如し。夫れ大格は

元と我といへる觀念に伴ふものなり。然るに小供には自我の觀念なし。故に自己を制する力あることなし。漸次成長するに従つて、自我の觀念を生じ、人格を生ず来る。然るども至りて薄弱なり。看よ、其前に美味を置かば、容赦なく喰ふ。恰かも。猫が客間に於ては、主人ある間は靜にしてあれども、客を送りて主人玄關に至れば、直ちに其響應の品を盗むが如く、小供も親が制する間は靜坐し在れども、其制するもの不在ざるや、直ちに其品を犯す。是れ確かに彼等の慾を制御する主宰力即ち人格なき証據なり。然るに斯の如きは、只たに猫或は小供の類のみなるか、否然らず、社會は實に斯の如き徒類を以て充滿せり。所謂紳士が妾を畜へ、若くは貸坐敷等に至る、其の惡行爲なるを知れり、然れども肉慾に支配せられて、自己を支配制裁する能はず。一匹の女か舞へ、或は死したる眞似を爲すべしと云へば、一も二もなく其の言の如くす。學生が酒に耽るは惡しと知る。然れども之を制裁すること能はず、己自を以て自己をもてあませり。遂に自暴を犯すものすらあり。又生活の困却若くは豊かに生活せんがために、聖職を捨て、主義を捨て、遂に誘惑に逢遇して、之に降伏し、無理往生するものあれば、また誘惑の前に自から強て墮落するものすらあり、是れ即ち彼等に彼等をヒューマニチーらしく活動せしめ得べき主宰力即ち人格なき証據たるなり。

斯くの如く論じ去り論ぎ來れば、主宰力即ち人格は、ヒューマニチーの心靈的死活問題に大關係あると明白なり。夫の能く熟達くしたる騎士か馬に乗る時は、如何なる狂馬も自由自在に御し得れども、素人之人に乘らば能く御すること能はざるのみかは、自己を害するに至と常なり。眞に人間も亦た斯くの如し。人格ある人間は、喜怒哀樂の情を適當に容易に制御するを得、愈々超達すれば、人間のあらゆる動作慾情を自由に行使することを得て、心の決する所に従つて、馬を追ひ廻すが如く、

孔子が七十にして吾れ規矩を踰へずと云ひし如く、自己良心の決するまゝに、行爲を決する事を得るに至る。聖人とか佛陀とか基督とか云へるタリは、其の人格に對して冕冠したるに外ならず、其の勢力はと偉大なるものは、決して世に在存することなし。ヒューマニチーの尊むべき所以は、一に之の勢力にして、殖養しつつ、發揮すべきは實に人格なり。人格の外他にあらざるなり。一個人のみにあらず、一家に於ても亦た然かり。主人たる者にして、先づ主人自身の主宰力なければ、從つて家内に向て、主宰的能力を保有すること能はず。故に之れなければ遂に其家庭は不和を生じ、さなくとも殺風的にして、春風花を薰する底の趣味と快樂とを味ふとを得べからず。一國家も亦た然り、日本帝國が斯の如く活動するは、萬世一系の天皇ありて、此の國家に對し、無限絶對の力を存して、主宰し給ひ、國民が其手足の如くに支配せらるゝが故なり。是の主宰力ある故に、神聖にして犯す可からざるなり。支那が支離し、統一せず、シヤム朝鮮の近況の如くなる所以は、只だ、國家に主宰力なければなり。米國が聯邦的なるに抱はらず、隆々として強大に至る所以のものは其の中央政府に主宰力たる一の合力ありて嚴然として合衆國を統轄すればなり。英國の英國たる所以、獨乙の獨乙たる所以、また實に此所にあり。斯くの如く國家社會にも、一の主宰力なければ、一日も國家社會は成立若くは形成すること能はざるなり。國家は、個人ありて初めて國家ありと雖ども、又國家なくしては國民的個人はあらざるなり。是の兩者は即ち一にして、決して離して考ふべきものにあらず。故に個人にも國家にも、之の自明力たる道義力たる人格なければ、眞個のヒューマニチーとしては、眞個の家庭、若くは國家社會としては、一日も生活生存すること能はざるなり。今日日本社會を觀察するに、歐米と交通して其料を取りし以來は、實に屢々乎として進歩し、國家的

組織も發達し、法律も實に完備し學校も制度も稍々整頓し會社も、銀行も共に發達し、其他萬般の事業殆んど完備に近づくに至れり。然るに嘆息の聲は、何れの社會を通じて起り、何物か其の信據すべき、對象を求めんとしつゝ、ある潮流を表はし來れるにあらずや。殊に教育社會に於て嘆息の聲高きにあらずや。之れ何の故ぞや。制度は備はれるも、之を活用する人物なければなり。即ち自己を修むる事能はざるが故に、人を修化すること能はざるなり。學校の校長たるものにして、教師生徒の上に、嚴乎として愛然として信服せしむべき人格あるもの殆んど之れ無きが故なり。會々あるが如きは、信服にあらずして威服に過ぎず。威服は武斷的にして、精神的にあらず。故に教化し信服せしめ得る能力あることなし。

法律は完成したりとするも、素と法律なるものは、人格の作用なり。人格が原生命にして、法律は其動作の道筋を示す道なり。眞に法律は人格の顯現にして、決して本我の上に位するものにあらず。法律は自分即ち國民舉動の法則なり。則ち國民の行動を示したるものにして、是によりて束縛せらるるものにあらず。法則は生命あるものにあらず。故に法律其者は動くものにあらず、之を動かすには活物を要す。即ち人之を行使するものなり。然るに法律を立派に行ひ、之を實行するには、人物にあらずんば能はず。人物にして初めて法律は實行され得るなり。故に國民全体若し人物ならば、國家法律の要なく、之れあれば容易に實行し得るなり。蘇峯曰く、萬國に對しては、國家本位なり内國家に對しては人物本位なり。とは眞に名言あり。而して其人物たると否とは、之の主宰力の有無に由る。人格なければ無論人物と稱し得べき價值なし。蓋は自己を主宰する能はずして、人物たる能はざればなり。眞個の意義に於ての人物とは、人格あるの意なり。要するに國家總ての機關は、人物を

待て初めて完成す。人物は即ち人格あるものなり。

然れども是の人格道義力あるものは、殆んど日本國家に望むべからず。星氏嘗て曰く今日の三百代言は吾が掌中のものなり。威力以てを征服すると能はされば、金力を以て征服するとを得、然れども余が如何ともすると能はざるもの一人あり。即ち島田三郎なりと。以て島田氏の人格の大なるを知ると同時に、國民の腐敗せるを知るに足る。自分の決心を決行し、如何なる威力の前にも、其所信を實行する所に、是の人格は嚴平として存在する者なり。吾人は日本邦家の爲に、之の人格を鼓吹して止まざる覺悟なり。實に之を要するなり。人格の觀念か生じ、人格か國民全体に存在するに至らば、個人も國家も精神的活動を起し來たるなり。朝鮮支那の國民には些の人格的觀念だにあらざるが故に、今日の惘然たる境涯に陥りしなり。此の觀念を鼓吹する道徳も宗教もあらざりし結果なり。故に人間の中の王は、實に之の人格なりと確信す。之の人格なるものか嚴然として其個人の内に輝かば、其絶對的勢力は良心の眞面目を發揮す。良心既に活動發揮すれば、品格を生ず。品格は活ける偉大なる感化力なり。之の感化力あらば、其家庭を美はしくし、社會を感化すると更に喋々するの要なし。必然生ぜべき結果たるなり。今日の所謂教育家か其根本を忘却して、徒らに姑息なる消極的規則を設けて、制裁を自由活潑なる學生の頭上に加へんとするが如きは、實に至愚と云はまれば果た何とか言はん。偶々以て自家の無能と人格なきを暴露するものたり。苟も教育家として學生生活の指導者を以て任ぜ、彼等の同情者たらんと欲せば、學生を救導せんとする前に、自己を救ひ修養し以て、自己の人格を保有せざるべからず。而して以て學生に臨まば、學生を薰陶し、彼等をして向上的人物とならしめ、精神的生活を層一層高尚ならしむること實に容易なり。吾人は活ける

歴史に問うて其實例の多きに驚く。

斯く論議し來れば、人格的實在の有無如何は、實にヒューマニチーの死活問題に大關係あるを明にして、果然人格はヒューマニチーと云へる活動物の生存上唯一の勢力なり。實にヒューマニチーの評價は是によりて決定せらる。上述の如く造化萬有の最高者なる意義を表明せる、ヒューマニチーなる詞は、眞に人格の表徴にして、實にヒューマニチーと云へる眞價は、人格の實在に對しての謂なり。

人格的宗教

必然此に起るべき問題は、如何にせば人格を感得し、之を發揮し得るかにあり。

是れ現今所謂學者間の大問題となれるものなるが、予輩は曰く、之を修得し發揮するの道、唯た宗教の力にのみ職由ると。然りと雖も予輩は漫然宗教に由るべしと云ふものにあらず。若し夫れ單に宗教と云はゞ、神道も儒教も佛教も皆是れ一の宗教なり。然らば果して是等の宗教は、該問題に對して解決満足を與へ得るや、予輩は實に疑ひなき能はず。素より全然効力なしと言ふものにあらざれども、其根本的思想に於ては、寧ろ大膽に其資格なしと云はんと欲す。其勢力あるもの、如きは、ろは外部の刺撃と、附屬教理に由るのみ。該問題に對して満足を得るは只た眞に人格的宗教に依るの外なし。儒教及佛教は吾人の宗教的意識及び情感を修養する上に於ては、與りて力あることを知る。然れども是等は非人格的宗教なり。既に非人格的宗教にして、人間に人格的觀念を生ぜしむる理あることなし。宜なり東洋諸國の國民か人格的觀念なきは。儒教の天、佛教の眞如―佛、是れ皆抽象的文字(教祖の意は必ずしも然からざりしならんも)にして、活ける生命力あるものにあらず。

飽まで非人格的なり。東洋諸國の道德が進歩せざるは是れか爲なり。吾日本に於ても、神佛の數無數の多きにあれども、其神佛は國民の冥福佛冥福神にして、國民の道德心を鼓舞し、道德心の基礎を與へ得るもの殆んど一も之れ有ることなし。仁義禮智信忠孝是等を如何に教ふるも、其者自身の人格を呼び起し、人格的實在の觀念を與へ、之に對しての自覺を感得するにあらざれば、只勞ありて其効力たるや之れありとするも、るは實に腑甲斐なかるべし。然り人格的實在の觀念をも與へずして、仁義禮讓を是れ教ふと雖ども、そは砂の上に立てられたる家屋にして、非常なる誘惑に遭遇する時は、忽然其道德は其人より瓦解し、滅却し去るなり。遂に道義の殉死者たるべき、人權の犠牲者たるべき活動飛動の人物は決して起るべきものにあらざるなり。東洋に於て之れしきの要求に對して、適應する人物の寥々として曉星の觀だになく、吾人をして失望せしむる所以は固より其所なり。要するに隱遁的社會に於ては知らず。苟も此の活動的社會に於ては、到底其人格を直養し、其人格を保存すること能はざるべし。而かも又無理なき結果なりと思惟す。儒教の君子は危きに近よらずとの獨清的主義、佛教の佛教要部精神たる出家主義寂滅主義は之れが表證にして、決して言逃るべしうもあらず。殊に佛教が心靈上の虛無黨となりて、道德發育に此の効力なきに至りしは、如上の原因によらずんばあるべからず。佛教素より出家主義一本槍にあらずして、波羅門教の超越的に反して平民的なりき。樂天的端緒を有したりしとは吾人も等しく認むる所也。然り初代の佛教は、能く波羅門教の弊を改め、印度の精神的革命を斷行し、精神的自由を民衆に與へしほとなりしも、佛教の勢力は世捨人の手に存じ、只管寂滅主義を奉したるために、佛教初代の勇氣は夢の如く消ゆ、國民の元氣を沮喪せしめ、義憤的氣性を破壊せり。而かも非人格的宗教の感化のなすべき當然の結果なり。

「曰く、佛教は其生るゝや活潑なりしも、瞬時にして老耄せりと、眞に至評といふべし。是に於てか之の問題の解決に満足を興へ、其使命を完ふし得るものは、獨り人格的宗教に由るのみとは、予輩に於ては必然來るべき斷定なりと信ず。乞ふ予輩をして敢て憚る所なく自由に之が討究をなさしめは。」

然らば是に必然起るべき問題は、如何なる宗教が人格的なるかにあり。曰く
人格的宗教とは基督教なりと。(未完)

